

# まちづくりと戦略的な維持管理について

## ～地域資源の活用～

### 1. はじめに

江別市は、石狩平野の中央部に位置し、北部には北海道の母なる川「石狩川」と、南部には世界有数の平地原生林である「北海道立自然公園野幌森林公園（2,051ha）」を擁する、水と緑に恵まれた人口約12万人のまちです。

また、道都札幌市に隣接した札幌経済圏であり、新千歳空港へ車で40分、北海道縦貫自動車道の2つのインターチェンジがあるなどの交通網が整備され、物流拠点としても注目を集めています。

市内には、4つの大学のほか、2つの短期大学、5つの高校等があり、加えて、道立食品加工研究センターや道立工業試験場野幌分場、民間の北海道電力株式会社総合研究所、株式会社北海道情報技術研究所などの研究機関が立地し、産学官の連携で企業支援を進めることができる環境にあり、まちづくりを進めるうえで貴重な「地域資源」となっています。

### 2. まちづくりと地域資源

「江別のれんが」は、100有余年にわたる製造の歴史をもち、市内には学校、サイロ、民家、倉庫など多くの歴史的れんが建造物が現存しています。

これらをまちづくりに活かそうと市民団体の活動も活発となり、本市も歴史的れんが建造物を保存活用するなど、市民と産学官が一体となった取り組みが行われています。このような取り組みが

評価され、「江別のれんが」は平成16年に「北海道遺産」として認定されました。

一方、春まき小麦で「幻の小麦」と呼ばれている「ハルユタカ」の「初冬まき栽培技術の確立」\*や「江別産小麦の高付加価値化」を目指して、平成10年頃より小麦を通じた産学官民ネットワーク「江別麦の会」（地元農家、地元製粉会社、JA道央、地元大学、各研究機関、本市）において研究が進められてきました。

その後、「江別麦の会」、地元製麺会社などにより「ハルユタカ」を原料としたラーメンの商品開発への取り組みが始まりました。これは江別産100%の「ハルユタカ」とブレンド適性に優れた「ホロシリコムギ」を絶妙な割合で配合し、讃岐うどんの製麺技法を取り入れ、これまでにない食感と風味豊かな麺の開発に成功し、いわゆるご当地ラーメンとは違った、麺そのものを味わう全国初の“産地麺”として、「江別小麦めん」と名付けられました。



江別小麦めんの商品

\*初冬まき栽培技術：根雪の直前に種をまくことにより融雪直後から生育を開始させる究極の早まき技術

江別市長

三好 昇



現在、「麦の里えべつ」キャンペーンも展開され、市内約20店舗の飲食店で約百種類以上のメニューが提供されています。

こうした環境負荷の少ない小麦の栽培方法の確立や、さらにこれを活かした製品の開発など、低投資で持続可能な産業構造を作っていくことは、地域に適したまちづくりの方向を示唆するものと考えております。

### 3. 持続的な維持管理と未来への投資

国、地方ともに財政環境は厳しさを増しており、本市においても高度経済成長期に都市基盤が急速に整備されてきたことから、同時期に建設された河川、道路、市営住宅等の社会資本施設が近い将来、大量に更新時期を迎え、維持費等の費用が大幅に増大することが見込まれています。

こうしたことから、施設数の多い橋梁において、施設の有効活用、更新費用の平準化、ライフサイクルコストの縮減を図る「アセットマネジメント」の考え方を導入した総合的なマネジメントシステムの構築を目指し、今年度、市内全ての箇所点検、データ収集を行ったところです。

また、将来都市像を見据え、安全で快適な都市生活の充実を図るため、地理的にも本市の中心に位置し、近年、商業・業務施設の集積が進んでいる野幌駅を中心とした約240haの区域を都心地区と位置付け、都市機能の充実や賑わいのある都心

づくりを目指す「江別の顔づくり」(連続立体交差事業、土地区画整理事業、街路事業)を推進し、持続可能な都市の基礎を固める「未来への投資」を進めているところです。



連続立体交差事業

### 4. おわりに

近年、地方自治体を取り巻く環境は、本格的な地方分権の推進、少子・高齢化の進展、かつて経験のしたことのない人口減少化、市民ニーズの多様化など、急激に変化しています。

本市は、こうした厳しい環境変化の中にあって多くの課題を抱えていますが、社会資本を適正に維持管理できるシステムの構築を目指すとともに、「地域資源」である市民、大学、企業などが手をつなぐ「協働のまちづくり」を進めて、市民一人ひとりが輝く魅力と夢のある「オンリーワンの街づくり」にチャレンジしてまいります。